思想史上の新日本

矢吹慶輝

只今迄有意義な御話の後で斯ふ云ふ題目の下に私の所感を述べさせて戴かうと思ふのであります。

只今御話のありました繪畫に付きましても時代に依つて繪畫の一種の流行があるやうに思はれるのであります。平安朝の繪畫は必ずしも德川時代の繪畫と其趣味を同じうするものでないと云ふ事は、時代に依つて流行が變ると云ふことを語つて居るものと思ふのであります。

十九世紀の半頃に開かれました宗教學と稱する、宗教の科學的取扱ひをしやうといふ大膽なる計畫の下に興りました宗教學も僅か茲七八十年の間に始終流行がございまして、神の源は太陽神話であるといふ說が勢力を得ると、斯うなると、なんでも彼でも太陽神話に持つて行つてしまつて、終ひには御釋迦樣も太陽神話になぞらへて、十二因緣は要するに無明の暗闇の中から太陽が出て來て、終ひの生老病死の死は太陽が西山に這入る事であるといふ說明が起つた時代もあります如何なるものでも流行のあるものであると云ふ事は爭はれない事實でありまして、科學にすら一種の流行があるのであります。アインシユタインの相對性原理が前にあつた。其前にはニユートンの重力說があつた、一種の流行と考へて考へられない事は無いと考へるのであります。斯ういふ意味で新日本の戊申から戊申、明治元年から昭和三年に至る滿六十年の間思想的に流行がどういふ風に動いて、今又如何なる方向に向ひつゝあるかと云ふ事を觀察する事は興味ある事柄であると思ふのであります。

一寸お互ひが時計を胸に下げるに致しましても、最初時計の下げ方といふものは此所の所(チヨツキの右ポケット)から下げまして時計をこゝに(チヨツキの左ポケット)に押込んだのでございますが、此遣方は明治の中年の流行でありまして只今の若い連中は大抵アメリカ流にこゝに(チヨツキのボタンからチヨツキのポケットに)下げるのであります。だから時計一つの下げ方に付きましても明治六十年の間には大變な變化があるやうに思ふのであります。

女の髮の毛に致しても、明治の初年に津田梅子女史がアメリカに留學せられる時の束髮の結方は上に上つて行つたやう

でありますが、日清戰爭日露戰爭頃は前へ〳〵庇が出て行つて庇髪といふ名前すら出たのに、明治のお終ひから段々後の方に引つ込んで行つて終ひには庇が行衛不明になりました。（笑聲、拍手）さうして今や七三、耳隱し、斷髪、もう既にバリーでは斷髪は廢つた相であります。日本が今流行の中心であると云つてもよいと云ふ事は何を語つて居るか。行衛不明と云ふ女の髪の結方は一體全體何を語つて居るだらう。日本の思想界にして若し行衛不明であるならば、吾々は實に心細さを感ぜざるを得ないのであります。

お互の髪に致しましても、明治初年のスランス髪、續いてカイゼル髪、最近ではヨーロッパの戰爭最中にはアメリカのチャーレー、チャップリンの眞似をして、それも行衛不明になつてしまひました。

今現代の若き日本の婦人は何を日本の女の髪の結方として守つて居るであらうか、男といふ男は如何なる髪の恰好を現代日本人の髪として採つて居るのであらうか、斯う考へて見ますと、どうも到る處に行衛不明があるのでは無いかと思はれるやうな事實が多いやうに考へるのであります。

茲に私共が新日本、僅か六十一年の間にどういふやうな變化を經たかと云ふ事を考へます前に、人間の思想の歴史と云ふものは如何なる性質を有つて居るものであるかと云ふ事を極く簡單に述べまして、六十年間の思想の變遷を考へて見たいと思ふのであります。

誰が名を附けたか分りませんが、日本語では吾々人間の事をひとと申して居ります、是は言ふ迄もない事柄でありまして、ひとはひがとゞまる、それがちゞまつてひとと云つたのであると云ふ一説があります。日は卽ち太陽である、月は始終形が變る、大きくなつたり小さくなつたり致しますけれども獨り變らざるものは太陽である。此太陽の如き圓滿なる德を備へて居る者は他の動物に見出す事は出來ないものである。たゞ單りそれは人間卽ち人にのみ見出すのであるから、人の心には日が留まる、神前の圓い鏡が之を表徵して居るやうに、此特色を持つた者は人であると云ふので、吾々の先祖が吾々人間を人と名附けたと云ふ事であります。日本人は人間ほ日が留まるものである。他の動物は日が留まらんものであると考へたのが、人と他の動物との違ひであると見てよからうと思ふのであります。支那人は雌と雄との「人」といふ文字を拵えた。文字は平面に書いたから、斯うなつたのでありますが、立體的に考へるとしたならば、これでは轉びますから、茲にどうしても一本つつかい棒がなければならなかつたと思ひます。けれども併し陰陽の思想、二元的の思想に依つて起きましたる支那思想は雌と雄の社會を平面的に考へたから依りつもたれつの社會をつくる、陰と陽とが相合して人間社會をつくると云ふのが人の原因であらうと思ふのであり

ます。

ヨーロッパの言葉の中にはラテン系、アングロサクソン系其他色々ありますが、暫くアングロサクソン系の英語のマン（man）ドイツ語のマン（mann）是等の言語の原は、或る言語學者の說に依りますると、サンスクリット、梵語のマヌーシャ（manusa）と其語原を同じくするものであつて、サンスクリットのマヌーシャ、英語のマン、ドイツ語のマン、悉くマン（man）といふ語根から出たものであると斯う說明してあるのを聞きますが、マンとは何である、考へると云ふ事である。故に吾々人間の特色は西洋人或は印度人は考へるものであると云ふ特色を以て人（マン）と呼んだのでありまして、日本と支那と西洋とは人といふ名前に付てだけ考へて見ましても他の動物と違つて居る特色は、太陽のやうに完全無缺な思想が宿つて居るものか、或は合理的な考へをするものかを人間と云つて、他の動物には此作用が無いと考へたのであります、蓋し動物と人間との文化史上、歷史以前の區別はどこから來たかと申しますると、先づ第一に火を使ふと云ふ事から始まる、他の動物は如何に進步を致しましても今日火を使つて居る動物は世界中に一匹も無いのであります。サリベリヤの大荒原、アラビヤの大荒原或はアフリカの野原の中に野宿致します旅人は必ず猛獸の襲來を恐れる爲に、四方に火を焚いて其中に寢て居ると。決して如何なる猛獸と雖も、やつて來ないと云ふ事は、今の動物は火には適はぬのであります。併し吾々は此火を自由自在に使つて居る、最初はたゞ大自然の森林に檜と檜とがすれあつて、そこに出て來た火を永久に保存して使つたのでありますが、今や吾々はマッチ其他によりまして人工によつて火をドン〳〵作り、此火を動力として實に產業革命も起れば今のやうな困難な社會問題も生み出すやうになつたのであります。故に火を使ふと云ふ事の爲に動物と人間との今日に至る迄の違ひがあつた如く近時の生活に於ても人と動物との違ひがあるのであります。

第二には吾々人間は道具を使ふ。動物は道具も使はない。尤も猿の如きは一寸した簡單な道具は使ひますけれども、吾々のやうに御飯を食べるのに箸を使ひ、或はスプールを使ふ或はフォークを使ふ、ナイフを使ふと云ふやうに、何んでも彼でも道具を使つて居ると云ふ事は、他の動物には見られない事柄でありますから、人と動物の第二の違ひは道具を使ふか使はんかと云ふ事である。

けれどもそれよりももつと重大な問題は人間が言語を使つて居ると云ふ事であります。此言葉は誰が發明したか分りませんが、どの國にあります言語でも、言語の發明者といふものは無い程、吾々の記憶に殘らない原始の狀態から言葉と云

ふものがありまして、此言葉は私共の思想と密接な關係をするのでありまして、他の動物との違ひは言語を使つて居ることいふ事が人間の特色であると同時に、思想を用ひて居ることいふ特色を言表して居るものであると云うてよいのであります

要するに人間と動物との原始狀態から今日に至る迄の違ひは、第一には火を使ふか使はんか、第二には、道具を使ふか使はぬか、第三には思想を表す言語を持つて居るかどうか、斯ういふ問題になるのでありますが、最後の第三にある言語を使つて思想を表すといふ此腕だけは他の動物に見る事の出來ない人間の特色なんでありまして此思想あるが爲に吾々は三千年四千年乃至は人類文化の搖籃期でありました。只今華の都のパリー、ロンドンがグラシアー氷河に包まれて居つた原始の狀態でも吾々は思想に依つて其昔を知る事が出來、又將來此世界がどうなるものであるかと云ふ事も思想によつて知る事が出來る。アルファ　センタウルの星から此地上に達する迄には、物理學上光の速度は無限大と考へられて居る、其無限大の光でさへ三年間かゝらねば地上に達せられないやうな遙遠な彼方にあるアルファ　センタウルの星も吾々の學問の力に依りまして知り得ると云ふ事は、世界の實に無限大の終極であると云つてもよいやうな遠方の世界迄、思想の御蔭で解るのであります。支那人は之を放てば六合に彌り、之を卷けば、密に藏るといつております。摑まふと思へば此心の何處にあるか分らない、併ながら心の中に働いて居る、此働きは、時間の上には永遠の昔を知り、永遠の將來を知る、空間の世界には、どこへでも手を伸して吾々が探り得ると云ふ事は、之はたゞ人間にのみ許された特色であると云つてよからうと思ふのであります。只今は、機械文明の世界になりまして電氣燈は皎々と輝いて居る、ガラスは到る處に利用されて居る、鐵が到る處に使はれて居る。蒸氣とか電氣とか、蒸氣が動力に使はれるやうになつてから百五十年、電氣が動力に使はれるやうになつてからまだ百年にならない、其間に世界がまるで一變するやうに樣子が變りましたが、之は結局人間の思想が物に現れて現代文明を作つて居るものであつて決して無なるものからして電氣燈が出來たのでないのであります。此意味は二つに分れるやうに思ふのでありまして、第一は人間は思想を有つて居るが故に考へると云ふ一つによつて此世界はどうでも作り變へて行けるものであると云ふ思想と、もう一つはなるが儘に推移つて居ると云ふ思想と、此二つが昔から今日に至る迄循環してやまずと申しますが、云はゞリズムを打つて、常に思想界に現れて來るのであります。

其どうするかと云ふ事を決定する場合には必ず過渡期の時代を作り出すのであります。動物は寒中になりますれば自づと毛が增えます。けれども着物は着ない、彼等は着る術（すべ）を知らんのである。併し吾々は夏になりまするこ着物を薄くする

冬になれば着物を厚くする、夏は氷を用ひ冬になれば煖爐を焚く。暑くなればごうするか、寒くなればごうするかと云ふことを人間は常に決定するのであります。動物は寒くなつても暑くなつてもごうするかと云ふ事を決定する譯に行かないたゞ暑くなつた場合なるが儘にまかせて生活するだけであるが、人間はなるが儘にまかせて置くと同時に、必ずごうするかと云ふ事を考へて生活する。茲に思想生活の特徴があると思ふのであります。其ごうするかと云ふ事を決定する場合には必ず過渡時代を茲に現出するのでありまして、暫く此過渡時代の例を宗教の歴史に付て考へて見たいと思ひます。

日本では六十年毎に大きな運動か、若しくは思想の動きがあつたやうであります。之はあつたやうであると申し上げるより外ありませんが、大正七年米騒動が起りまして昭和三年に至つて思想國難と云ふ事がこう〳〵議會に於て議決せられたと云ふ事は何を語るのであるか。私共國難と云ふ文字が果して適當であるかごうか大いに考ふべきものだらうと思ふのであります。若し國難と云ふ言葉を使ふならば、他に政治國難もあり相であるし、色々國難があるやうでありますが、其議論は暫く茲に除くと致しまして、議政壇上に於て思想國難と云ふ事を論じなければならぬ昭和三年と、王政復古の明治元年の第一の戊申との間に六十年の大過渡期があつたと云ふ事は、誰が之を拒み得るだらうか。今日斯ういふ風にして日本の歴史表を暫く六十年毎にきつて御覽になつて、六年から十年前後を御覽になれば必ず何か違つた思想が表れて居るやうに私は考へるのであります。支那の歴史と日本の歴史は十干十二支に影響せられて六十年毎に必ず變つて居るやうである。之は多少獨斷があるやうでありますが、ごうもさういふ氣が致すのであります。百年毎に一世紀〳〵と分けて行くのは西洋風の考へ方であります。西洋には十干十二支がありませんから百年毎に一世紀として割つて行くのであります。併し佛教では殆ど總ての御經が申合せたやうに五百年を以て一期と限つて居るのであります。法華經の後五百歳が其一例であつて、正像末の三時をごうして分けるかと云つた時に、五百年を基數にしたのであります。

暫く此五百年と云ふ數を取つて茲に世界の歴史を考へて見ますと云ふと、今や二十世紀の時代であるが、此二十世紀の時代に、未だ曾て見ることの出來なかつた新しい思想が世界に動いて居る。これだけは誰も拒む事が出來ないでせう。それがよいか惡いかは別問題として、思想的大變動が殆ど世界の野に山にも弘まつて居るといふ事は拒む事が出來ない。此二十世紀から五百年遡りまして第十六世紀の終ひは、かの宗教改革の起つた時でありまして、千五百十七年ウィッテンベルヒ大學の教授であつたマルチンルーテルが九十五箇條の宣言をして、法王廳に反した年であります。此十六世紀の宗教

改革は全く坊さんと俗人との區別を撤廢するといふ原則を提出したものでありまして、信者全體主體がである、信者全體が神と人間との結びつきをする役目を持つて居ると云つてよいものである。と云ふのでありまして、斯ういふ思想は西洋では曾て現れなかつたのであります。日本では法然上人の念佛義が之を言ひ表し、親鸞聖人の御同行といふ思想が之を明瞭に言明した、あれと似た思想が西洋では日本に後れること四百年、第十六世紀に至つて宗教改革と云ふものに依つて起つたのであります。然るに此宗教改革は一個人〳〵が宗教を信ずる自由を有つと云ふ主張でありまして、同時に本當の信仰は坊さんだけにあるのでなく、俗人の中にも起り得るのであると云ふ事を主張したものであつて、其思想の影響が流れ〳〵て、教育上には人格尊重、個人本位となり、之が經濟問題に流れて參りまして、現在の所謂社會思想の混亂を來した一つの原因となつた資本主義なるものは、實は宗教改革の影響であつたのであります。俺の儲けたものは俺の物である、人にやる必要は無い、俺の儲けた物は俺が勝手に使ふのは自由である、と云ふ此思想は、中世時代には西洋には無かつた思想であります。愈々宗教改革と云ふ事が現れまして個人思想が明瞭に表れたと云ふ事は、無論、宗教改革にはよい點も幾多あります、けれども現在の第二十世紀の問題になつた、此問題の源泉を探つて行くと何ぞ知らん、あの美しき宗教改革の中に、今の社會が惱まなければならぬ或る種の動機が茲に與へられたと云ふ事は拒む事が出來ないのであります。さうしてヨーロッパの前途は此宗教改革の爲に今迄中世千三百年の間教權に依つて抑へ來つた此教權に搖ぎが來まして、且つ個人が宗教の問題は自由に選擇してよいといふ思想を生み出すやうになり、其結果日本の憲法にあります通り安寧秩序を妨げざる限りには信教の自由を許す、信教の自由を許すと云ふ其裏には、日本帝國臣民たるものは宗教を信じなければならんと云ふ事は無いと云ふ意味が這入つて居る。之は德川時代に無い事であります。お前が宗教を探す場合には何でも御前の勝手なものを御取りなさい、之は德川時代に無い思想であります。宗教を信じなくても帝國臣民たるの資格には何等の缺陷もないと云ふ思想、宗教は全く御前の自由であると云ふ此思想はどこに原因を求むるであらうか、吾々は少く共宗教改革——西洋の思想では其流れに主なる原因があつたと言はざるを得ないのであります。

更に五百年遡りました第十一世紀になりますと、此十一世紀から約二百年間は、所謂西洋に十字軍の起つた時代でありまして、總てのヨーロッパの人といふ人が、宗教の爲に命を投げ棄てゝ死する事を無上の名譽と思つた時代であるのであります。

それから五百年遡りまして六世紀になりますと、東には佛

教、西には基督教、其丁度中間に出て歐亞の大陸を二つに分け、其眞中を占領したマホメット教が現れたのでありまして更に遡りますれば第一世紀になりまして之は言ふ迄もなくキリスト教が起つた時代である。それからもう一つ五百年遡りますと、これ又言ふ迄もなく佛教の起つた時代である。

斯う考へて見ますと云ふと佛教の經典が五百年毎に一世紀を畫して來たが、此一世紀は偶然にも、世界の歴史を眺めて見ますと、二十世紀の思想不安の時代、十六世紀の宗教改革の時代、其前の宗教に殆ど盲目になつた十字軍の時代、續いて

キリスト教と佛教との向ふを張つて世界三大宗教の一つとなつたマホメット教の起つた時代、それから五百年遡りましてキリスト教の起つた時代、それから更に五百年遡りまして佛教の起つた時代、私は世界の思想史を見まして是位人心が激動した過渡時代は他には見出すことが出來なかつたと思ふのであります。斯う云ふやうな人間の思想は誰か後にあつて操つて居るか分りません、此の問題を若し探りますれば簡單な答は何の樣な學者でもなし得るものではない、又議論をしたところが結果は分らんやうに私は思ひます。歴史哲學と云ふ學問がございますけれども、結局は一種の運命觀に過ぎないと思ひます。吾々は母の胎内から出てあつと云ふ泣聲を致します。愈々死んで行く時にうんと息を引取つて行く、お寺の仁王門の一方に仁王さんは口を開いてあつと生れた聲を出して居ります。西の方の左の方にある仁王さんは口を閉して息を引き取つた形をして立つて居る、人生畢竟アからウンへの六十年、おぎゃあと生れて盥より盥に移る五十年經帷子は娑婆の給金であるではないか、それはその人の人生に齎らす力に由つて現れるものであると思ひますが、併し此の平凡な分りきつた事實かこゝにお集りの如何なる人も經驗してお出になつて而もあつと生れた其の瞬間に吾々は何故にかゝるお父さん、かゝるお母さんの間に生れたであらうか、もつとよいお父さんお母さんの間に生れなかつたであらう、

なんと云ふことは親に對しては甚だすまん事柄でありますけれども、考へ來れば之の說明は出來ない。フランクリンの自敘傳には、フランクリンが今一度生れ直して來て、自分の生涯をやりかへても、もはやこの自敘傳に書いてある、順序以外には踏めないと云つて居りますが、私共はさう云ふ人の世の中にあるのを洵に不思議に思ふ位でありまして、若し今一度、君は生れ變つて來て四十年五十年の生涯を盡す場合、今迄の經過と違つた道を執るであらうか同じ道を來るであらうかと云はれたならば、私は言下に違つた道を來たいと考へるのであります。併しながらざうも致方ありません――只今

は(笑聲)今一度生れなほしてなんと言つてもごうも仕方はない、只今私の兩親は死んで居りますけれども、今私の父や私の母が欲しいなんと考へてもこれは致方ないのでありますから、一個人にあつてもあつといふ聲によつてこの人生に生れたその瞬間から一種の運命に囚れ、世界歴史から云つても亦人類の黎明期以來一種の運命に囚れ、さうして始終ごうなるか、ごうなるかと變動して居る。此のごうなるかの間にごうするかと云ふことを考へ出して來る所に新しい人類の創造もあり、文化の創造もあるものと思ふのであります。これから明治元年からして昭和三年に至る六十年を回顧致して見ますれば、凡そ私は三つに變つて來たやうに考へるのであります此の間の大阪日日新聞(大阪毎日新聞?)から、近頃マルキシズムの本が非常に賣出されて、全で洪水の狀態になつて居るやうに思ふが君はごう考へるかと云ふ御紹介がありましたから、私は斯う云ふ風に端書で御答をしたのであります。何も今になつて日本が右や左で騒いで居るのではないのであつて、明治元年から昭和三年に至る迄右左の運動は度々あつた少くとも三つあつた、其の三つは是れからお話して行きますが、この三つの右左の運動の間に日本國民の執りし態度、竝にその問題の決着を考へて見ますれば、それは軈て現代の右左の問題に何か暗示を與へるものではないか、日本は要するに、右へ行つても左へ行つても南へ行つても北へ行つても、東も西も段々歩いて參りますること皆四面繞すに海を以てして居りますから、陸が盡きてしまつて居る、日本人の思想を斯う云ふ立場で考へて見ますること云ふこと、ごうも昔から今日迄徹底した極端な思想と云ふものは、日本人の頭にむかなかつたやうに考へるのであります、之は環境の影響があるものと自分は信ずる、斯う云ふ意味合に於きまして幾等マルキシズムの圓本がごん〳〵流行致しましても、落着所は誰も豫言出來ませんが、そんな上べのものでないではないかと私は考へる、斯う云ふ意味を私は書いて送りましたが、暫らくの間その考へを此處で述べさせて貰ふと思ふのであります。

日本人の生活の中で外國人と違ふ、ヨーロッパ人やアメリカ人と違つて居る生活樣式の中には色々あります、日本人は元來植物の中に生活したものである、喰ひ物は葱、大根、牛蒡、人蔘、魚は喰ひましたけれども四つ足は喰ひません、四つ足を喰ふやうになつてしまつたのは明治文化の賜物であつて、私共の食ひ物が植物性から動物性に變りつゝある、是は誰人も拒むことが出來ない。その次に私共の着物は德川時代迄は町人百姓は木綿物であつて、絹を着ましても女の着物の模樣と云ふものは皆植物の色を著けて居る、是はやはり植物が變しいからだらうと思ふ、動物の模樣は極く僅でありまして大抵植物性の模樣であつた、所が今日の吾々の着物は殆んど皆動物性に變つて來た、衣食住の衣が動物から植物に變つ

て來た、食ひ物が植物から動物に變つて來た、夫れでは住宅はどうであるか、斯う云ひますと、私共の先祖は曾て石に住んだり煉瓦に住んだことはなかつた、皆木で以て作りました る家に住んで居ります。元來日本人は元は穴居であつたに違ひない家と云ふ字はう冠りに家を書きます、う冠りは穴と云ふ字の略字でありまして、穴居時代の人間の家は穴であつた兩方に斯う云ふ點を竝べたのは下の水氣で品物を置くと濡れますから棚をつつた印である、（笑聲）う冠りの點は棚の入つて居る印を附けたものであると云ふ、是は國史の先生から私の大學學生時代に聞いた講義の受け賣りであります、そんならなんで家に豚をつけたかと云ひますと、自分の家に豚を同居させて置くと穢なくて仕樣がない、幾等原始人でも豚が穢ないことは分つたと見える、併し豚に逃げられても困りますから木で以て檻を作つて、其の檻の中にぶちこんだのでありますから今我々が使つて居る家と云ふ字は豚小家の意味である、所が段々人間が進歩して參りまするとと人間が地面の中に住んで居つてはいかんと云ふ譯で、豚小屋を木で作つたのを家に應用して茲に始めて人間の家といふものが出來たと云ふ傳統によつてあの家といふ字を書くものだといふことを聞きましたが、此の豚の樣な土居の時代はいざ知らず、日本文化のはつきり分つて居る所では南洋系統に關係があつたのでありませうが、只今シンガポールの邊を歩きますと、よく日本人の住宅の原を私共に考へさせるやうに思ふのでありますが兎に角木造の建築である、木造の建築が煉瓦になり石になりコンクリートになつたと云ふことになりますれば、植物の住宅から鑛物の住宅に變つたと云ふことであると思ひます、然らば着物は植物。動物に變り、食物はやはり植物から動物に變り、住宅は植物から鑛物に變つた、此の生活樣式の變化が僅か六十年の間に行はれたのであります。日本人の頭に是れが響かなかつたであらうかどうか、私はどうしても何か響いて居るに違いないと考へざるを得ないのであります。其の上に之れは日本人が昔から傳來の生活樣式と變つたものを西洋から受入れたといふ事柄でありますが、日本人自らが心の上に日本人の思想の特色と致しまして、變はらなければならない何か約束を以つて居るやうであります。それは日本人に方きまして恐しいものを數へます時には、地震、雷、火事、親爺、と數へるのでありますが、この地震といふものは日本人に切つても切れない思想が日本では六十年目毎に大變動があると云ふ事が、云へるといふことを今申しましたが、地震も六十年目毎に大地震があると誰いふとなくさう云ふ風に考へて居るやうであります。奈良朝から德川時代迄に日本の正史に載りました地震の回數といふものは約三千回である、歷史に載らない地震は何度あつたか分らない、此の間大正十二年九月一日の震災以後昨年の何時頃でありましたか、或時迄

に地震計に感じた地震の數は二萬回であつたと云ふ事柄でありますから、日本といふ國は私共何時でも地震によつてぐらぐらさせられて居る國であるといふことは拒むことは出來ないのであります。

其の次は火事であります、木造建築の關係上火事が始終ある、殊に東京では火事といふことは江戸の花と稱へまして、火事は東京の町の繁榮の兆であるやうに考へました、他所の家が遠くで以つて川向ふで燒けて居る場合は山の上から見て居ると、もちつと火事が隣へ移つて燃えたらなんと云ふ横着な考へも出ないことはないのでありますが、自分の家の隣からぼつと出た時に周章てない人は恐らく人間でなからうと思ふ。（笑聲）さうすると木造建築の關係上始終火事が起つてぐらぐらさせられ、地震が起つて奈良朝以來三千回も私共の先祖はぐらぐらさせられた、かてゝ加へて日本は島國の關係上氣流の關係上雷が多い、鳴つてゐない時は誰でも恐はくはないと云ひますが、あまり激しい雷が音と同時に稻妻がぴかつとやる時には誰しもぐらぐらせざるを得ないのであります。斯う考へますと自然の環境の影響によりまして、地震だの雷だの火事だのによつて心がぐらつかされて居る。かてゝ加へて政治界の元老を茲に出す必要はなからうが、何處へ行つても親爺が居る、日本は政治界と云はず經濟界と云はず宗教界と云はず一軒の家と云はず、親爺が頑張つて居つて、この親爺が始終ぐらぐらさせて居るやうである、（笑聲）斯う考へて見ると云ふと吾々は何の因果と申しませうか、或は子が惡かつたのかも知りませんが日本人は非常に感激性に富んで居る人の眞似をすることが上手である、是れは確かに地震と雷と火事と親爺の影響であつたといつて宜いだらうと思ひます。（笑聲）同時に吾々が思想上の問題にぶつつかる時に、何時でもぐらぐらさせられると云ふ特性を有つて居ると云ふことは警戒を要することだらうと思ひます。此の意味に基きまして明治大正昭和の三つの時期の間にどう變つたかといふことを考へて見ますと、先づ明治の初年には王政復古と開國進取この問題を授けられた、王政復古とは云ふ迄もなく鎌倉幕府以來武家八百年の間天日を黑雲が掩ふて光が地上に達しなかつた、その黑雲を除て昔の王政に逆戻りをさせやうといふのが王政復古であつたと思ひます。然らば之は云ふ迄もなく後を向きなさいといふことである。國民よ後を向けと云ふことである。開國進取とは國を開いて進み取るのでありますから五箇條の御誓文にあります通り廣く知識を世界に求め！私共引込んでは求めることが出來ないからどうしても進んで出なければならん。王政復古と開國進取とは前へ進めと廻れ右の號令を一度にかけたと同じことである、國民は前へ行かうか後を向かふか、之れが明治初年の右と左であつたのである。之を具體的に申しますれば、慶應の終ひにはまだ今の東京が

八百八町花のお江戸であつた、さうして二本ざしの武士が頭を丁髷に結つて駕籠に乘つて歩き廻つた、それが明治五年には人力車に變つた、之は今英語の字引を繰りましてもドイツ語フランス語の字引を繰りましても、みんな日本語として外國語になつて居ります有名な言葉であります。力車或は人力車と云つたならば大抵外國語に出て居る、日本語で外國語の字引に這入つて居る言葉にはろくなものはない、藝者であるとか將軍であるとか、坊さんをほんづと云つて外國語になつて居ります。之れは怪しからん話で法隆寺や八坂の塔を見たならばを西洋人はなんとか云ひさうでありますが、日本へ來た西洋人が如何に趣味が淺薄であつたかと云ふことを之れは語つて居るのである。（笑聲拍手）

人力車は支那の北京や上海へ行くとトンヤンチャー、東洋の車と云つて居りますが、東洋とは何を云つて居るか、支那人が東洋といふのは日本だけであります。日本人が東洋といふのは支那印度の事を云つて居る、西洋人が東洋と云ふ時にはコンスタンチノープルから横濱迄を東洋と云つて居りますが、東洋は二通りも三通りもある、支那人が東洋と云ふのは日本だけでありますから、東洋の事といへば日本のことを云つて居るのであります、支那人のことを吾々はチャン〳〵と悪口を云ひますが、支那人は吾々のことをトンヤンキー、東洋の鬼といつて居る、（笑聲）人力車は支那にはトンヤンチャーとして日本發明の唯一のものとして紹介せられ、西洋の字引には人力車は殆んど世界語となつてしまつたと云ふ、これは明治五年に始つた事件である、而るに明治二年以來丁髷を切れといふ御布令が出まして、丁髷を切つてじやんぎりとなつた。二本差は廢めになつて丸腰になつてしまつた。東京は明治元年江戸の名前を改めた名前であります。斯うしますと慶應の終ひには二本差しを差した士が丁髷頭で駕籠に乘つて八百八町のお江戸を通つたのだが、僅か五年か六年經つた明治五年には丁髷頭を廢めてぢやんぎりになつて、二本差を廢めて丸腰となり駕籠の代りに人力車に乘つて お江戸の代りに東京を歩いたといふことは私はまだ生れて居りませんでしたけれども、（笑聲）作し想像しただけで成程恐しい變化であるといふことは、誰しも考へいな人はなからうと思ふのであります。

是れは形の上でありますが、内面問題として思想を考へる時、日本は丁度岐路に立つたのであります。王政復古は後へ向け開國進取は前に行け、子供を引つ張つて來て片手で後に引つ張り、片手で前へ突いたら子供は迷はざるを得ないやうに、德川時代下へ〳〵と土下座した人々である、何村の百姓何某といつたものが、佐藤でもよし高橋でもよし鈴木でもよし、犬糞でも何でも氏を有つことになりました、この私共の先祖が先輩が何村の百姓何某と云つたものが、佐藤何某と云

ふ氏を有つた時の心持は不幸にしてお父さんにもお祖父さんにも聞かずに了ひましたけれども、考へて見ると何とか考へただらうと思ひます。之れを一言にして盡しますれば人間の自覺が起つたといふことである、前に向け後に向けで動されるために、私は一體何ですかと考へて來たのでありまして、かて〻加へて外國のイギリスなりフランスなりが東洋に參りまして、白い顏をした人は東洋人に取りまして實に禍である今は日本人が標的になつて黃色い顏をしたものは禍なりと云つて居りますが、何ぞ知らん十八世紀前方の東洋の歷史を見れば、何としても白い顏は東洋に於け禍と云はなければならん、此の事も吾々の先祖が考へた時に、この大和民族は如何にすべきかといふ人種保存の衝動から之れを平靜に見ては濟まされません。大地震が來て鮮人騷をするやうに、血液の同じ人間は團結しなければならんといふ心が湧いて來るのであります。明治初年に動いた思想的標語は、先づ第一に王政復古、後を見なければならん、開國進取前を見よ世界を見よ汝等の種族は危いぞ、茲に人種保存の衝動が現れ、明治初年の右左が動き出して來て居ると思ふのであります。

さうして宗教的問題から見ますると神佛分離、佛さんと神さんの世界には德川時代の政策として決して手を觸れなかつた、然るに明治初年神佛分離といふ神や佛の世界でも人間の手を以て分けることが出來ると云ふことになつたものでありますから、其の思想の上から流れ出して來た新しい思想は云ふ迄もなく人間本位といふ思想であります。若し現代の社會問題でも思想問題でも、茲に困難をもつ所があると致しますれば、何でもものを人間同志で解決すると云ふことが困難な點であると、吾々宗教の學徒は考へるのであります。又考へざるを得ないのであります。そこでこの法律は人間同志の約束を以つてどうでも變はるではないか、社界のあらゆる文明の道具を始め機械を始め、さう云ふものは約束によつてどうでも出來るではないかといふ。卽ち人間萬能思想に基きまして人間が吾々以上のより高きものに對する尊敬の念といふものを失つて來た。恐らく日本二千五百八十八年の間、現代程私共が斯う云ふ畏敬の念の薄らいで居る時代は他になからうかと想像を致すのであります。所が斯う云ふ畏敬の念のなくなつたのはどこにあるかと云ふと、明治初年の右か左かゞ元になつて居ると考へるのであります。

第二の右か左かの思想はと申しますれば、明治十三年には民間の有志家が集つて、どうか日本も憲法を制定し立憲帝國にして頂きたいといふことを請願をした年であります。明治十四年には二十三年迄待つたならば必ず憲法を布いてやるといふ詔が降つた年であります。さうして明治二十二年確かに日本は立憲帝國になりました。此の後先きの年を取りまして、あの時代はどんな思想が動いて居つたか斯う考へて見まする

と云ふと、明治初年には官僚といふ言葉はありません。官僚といふ言葉の出來たのは丁度大隈さんが野に下つて改進黨を組織し板垣さんが野に下つて自由黨を組織した時代の特產物であります。所謂役人が段々官僚臭氣を帶びて來た時代であります。官僚に對して在野の二大政黨、大隈さんへの改進黨板垣さんの自由黨の中の叫びは民權自由、自由民權でありまして。所謂官僚に對する民權を擴張する上か下かと云ふ問題であつたのであります。明治初年は前か後か明治中年は上か下かといふ問題が縺れて、憲政布かれて三十幾年、漸く茲に普通選擧が本年二月代議士の方面には實施されるやうになつたのであります。此の普通選擧の現れました思想の元を明治中年に探るならば上か下かといふ右左の問題にあつたのであります。

所が大正七年米騷動以後、全く變つた右左が茲に現れて來たのが現代の右左の思想である。ロシヤに革命が成就した。獨逸も革命が出來上つた。オーストラリヤも帝國でなくなつた。ハンガリーも王國でなくなつた。ヨーロツパの地圖を開いて見れば戰爭前の地圖と戰爭以後の地圖と全く違い、政治も違ひ、思想も違つてしまつた。曾つては明治時代には社會と云ふ文字は危險思想であると云ふので政府は斷じて此の言葉を使はす。自治體に於ても斯う云ふことを避け、社會學の先生は社會學とは社會主義ではないと云ふことを前置して社會學の講義をしなければならなかつた時代があつた、然るに大正時代になりまするこ、社會といふ文字は流行語になつてしまひ、社會教育、社會立法、社會政策、社會教化、社會事業、社會奉仕、實に社會と云ふ言葉が濫用せられると云ふ程流行して來たのであります。外を見れば世界の政治の色合が變り、內側を見れば明治大正の間に、今迄禁物であつた社會といふ文字が流行する時代になつた、此の二つの事實を考へて見ても分ります通り、大正時代の右左は以前の右左と違つたものが現て來た、ごこが違つて居るのであらう、私は明治初年の右左は先づ王政復古開國進取といふ前後の右左明治中年は官僚政治に對する民權の自由と云ふ上か下かの右左、之れは何時でも假想敵を國外に置いた、外國か恐しいからごうかしなければならんといふことが主眼であつた、然るに大正昭和の右左は恐るべき外國がないでもありませんが、外側より內側に於て お互同志假想敵を設くることになつたといふ明治時代とは大なる變化であると思ふのであります。日淸戰爭の際李鴻章は丁度今日本には議會に於て二つの政黨が大喧嘩をして居る、あの際戰爭をやつたならば日本の國論が二つに分れ足並が亂れて敗けるであらうと、北京に於て考へた豫算が全部外れてしまつて、一たん宣戰が布告致されまするこ犬猿水火もたゞならざりし仲の惡かつた二大政黨が合して一丸となつて支那に當つた、此の事情が何より能辯に上か下か

の問題は結局外患に對する關係であつたといふことを物語るものである。明治初年の思想は斯う云ふ關係でありますから如何に右左に動搖しても、事一度國内を視渡しまして國外に眼を轉じます時、日本が如何なる位置が考て見よ、と斯う一度叫べば如何なる問題も片が付いたのでありますが、大正昭和の時代には傾向が違つて來た。ごう違つて來たかといひますと、現在日本にある問題は何であるか、いふ迄もなく人口問題である、明治元年には三千五百萬であつたものが、明治二十二年三年の丁度代議士選擧を致しますために數へました時には三十七百萬人、二十二年の間に二百萬增加致しましたが、大正十年第一回國勢調査の時には、臺灣朝鮮樺太を除きまして本土の人口驚く勿れ五千七百萬、あと三十幾年の間に二千萬增加したのであります。この人間が殖えたに對して何か起つたかと申しますれば言ふ迄もなく、一つの學校から澤山の卒業生が出ます場合、其の就職口を探してやることの爲にはそこに競爭が起ると云ふことは云ふ迄もありません。競爭の結果として友達同志嫌な顏をするといふことの起るのは已むを得ません、さうして探した結果或者は仕事に失職致しまして口にあり付けないといふことは已むを得ません。人間か殖えた結果丁度此の狀態を現はして來たのであります。若し人口問題から考へて見ますれば、是れは海を越へて外國に目を轉ずるのが今日迄の人口問題の趨勢であつた、所が今大平洋を隔てゝ丁度向岸を見まするとカナダも日本人の來ることを許さない制限を加へて居ります。北アメリカ合衆國も日本人入るべからず、メキシコも日本人入るべからずとして居る。まだ澤山行つてゐない内からオーストラリヤも既に日本人入るべからずの標札を立てゝ居る、僅に南米ブラジルは日本人を歡迎するものがあるやうであるが、是れは何年續くか分らないのであります。斯う考へて見ると表日本をずつと見渡し裏日本を見渡しますと成程そこには茫漠たる土地がある併しそれはロシヤの土地であり支那の土地であつて吾々の土地ではない、アメリカは日本の幾十倍の彪大なる大陸を控へて置きながら、アメリカ本土の人口は僅に一億五百萬、日本は猫の額のやうな所に居りながら、世界總人口の三十分の一であります。世界の人間三十人の一人は日本人によつて滿されて居るのであります。さうして日本人の住んで居ります地面は、世界の凡ゆる地面を三百五十に分けますと云ふとそのたつた一片しか持たぬのであります、地面の容積に於ては、分り易く言換えますれば一年三百五十日と見做して人口問題から云ふと、一月三十日分の貰ひ分があるに抱はらず土地の面積から云ふと一日分しか貰へない卽ち一日分を以て三十日の生活をしなければならんから、世智辛い生活をしなければならんことは云ふ迄もないことであります。

さうして毎年々々世界の總人口の百分の一づゝ日本人は殖

えて居るのである、これがどうなるであらうか、これは本當に容易な問題じやないのであります。それなら產兒制限をやらんかと云ふ、私は產兒制限等には根本から反對の人間でありますが、然らばそれに對してどうしたらよからう、當然此の問題は食糧問題となつて來ます。所が日本では每年五百萬石足らない、或說に依れば千二百萬石足らないと云ふことであります。そこでお米を外國から買はなければならん、この問題が斯う拗れて行きますと、工場勞働の問題となつて煙突の煙の立つ所その下には必ず資本と勞働との對立が起る。田地がそこにあります。野原がそこにあります、田畑がそこにありますといふと、地主と小作の關係が當然起らなければならん。差別待遇を受けたとて、少數同胞と少數同胞との喧合が起らなければならん、朝鮮民族と日本民族とは、血液が違つて居る。血液は違つて居るが、同じ日本人として同胞である、之れを如何にす可きか、男と女とは離さうと思つても喰つ付くから孔子聖人が男女七歲にして席を同じうせずと敎へたけれども、勞働問題經濟問題といふものは男女と云ふものを喰つ付けて置かうと思つても離れて行く、夫れだけ申上げては分らんかも知れませんが、イギリスが戰爭の最中に徵兵を五百萬人採つた、其の五百萬の徵兵の爲にイギリスの婦人は一整に立つて男子の仕事に當つた、然るに一たん戰爭が終つて之等の兵隊がイギリスに歸つて來た時、婦人は男子の出征中取つた仕事を更に返さないのであります。是れが大問題になつた。所謂フンドシステム、土地を耕し畑を耕さうといふ案が出る程男と女とが、經濟問題から喧合ふて來たのであります今日本にどんな問題があるか、それは外務省に行つたら色々な國際關係もありませう。現に支那に出兵して居るのであるから、國際問題として急迫したる問題もあるでありませう。併し國民大多數の興味の中心となつて居る問題は何であらう曰く人口問題、曰く食糧問題、曰く工場勞働問題、曰く地主小作問題、曰く水平運動の問題、曰く朝鮮人の同化問題、曰く婦人問題、是れだけを數へまして殆んど問題は盡したと云つてよからうと思ひます。之れは決して外國人を假想敵として居る問題ではないのであります。國の內側の問題である。斯う考へて見ますると云ふと、眞に日本の思想的の過渡期は僅かにこの六十年の間にすら三度變動を起して居ります。第一回の戊申は前か後かの過渡期であつた。第二回の戊申には右か左かの過渡期である、第一回の戊申の時に起りましたる新しい問題は量の上の愛國心の運動であつた、夫れは今迄君の馬前に於いて討死し、君の爲に死ななければならん者は兵隊、士であつた、而るに明治初年國民皆兵の詔によつて總ての人は兵隊にならねばならないといふことになりました。之は愛國心を國民全體に要求したと云ふことでありますから、

これは量の愛國心の增加と名付けてよからうと思ひます。この量の愛國心の增加によりまして、第一の前か後かの問題も明治中年の上か下かの問題も甘まく片が付いたのでありますが、第三の右左の問題に至つては量の愛國心だけではいかんのであります。一旦緩急ある場合義勇公に報ずると云ふことは私共が小學教育を受けた以來國民道德として大切なることゝ習つて居ります。無論今日と雖も今後と雖も一旦緩急の場合義勇公に報ずると云ふ魂がなくなつたならば舊日本がなくなつてしまつたと云はなければならんのでありますから、この魂は決して失ふべきものではないと考へますが、併ら一旦緩急は滅多にあるものではない、毎日〳〵一旦緩急々々々々で暮らしたならば大抵の人が神經衰弱になる。（笑聲）故に一旦緩急ならざる場合一旦緩急の心持を有する事は何であらうかといふと、只單り量に愛國心だけでは足らんといふことになつた。量の愛國心を補ふのに茲に新しい問題として現はれて參りましたのは質の愛國心であります。コンティティーの愛國心でなくしてコーリティーの愛國心である、斯う云ふことになるのではなからうかと思ひます。大正昭和の新しい時代新日本が思想歷史の上に今や蹈みつゝある危險なる狀態に當りまして私共に深刻に考へさせて居る事柄は何んであるか、言ふ迄もなくこの右左の問題の解決點であります。此の右左の問題の解決點は今迄の解決方法だけによつて解決し得るものではないのである。今迄の解決方法はつまり量の愛國心といふことも大切なことではありませうが、吾々は茲に質の愛國心に目覺めなければならん時代になつて來たと、斯う思ふのであります。

世界の思想を見渡しまして紀元前五世紀からして數度變つて來て、或時代を過ぎると過渡時代が來る、さうして又次の過渡時代に移る、其の間には一種のリズムがあつて、日本の今の右左の思想も思想ばかりを扱つて居る人間から云ふと、必ずその次にはこの思想が谷に落ちて別な思想が理はれるのもだらうと思ふ。又さう云はざるを得ない。何故ならば過去の歷史の通りに行くものならば、人間の歷史は畢竟繰返へすに過ぎないのでありますから、さうなるだらうと思ふのであります、併し茲に私は斯う云ふ題の下に申上げやうと思ふ趣旨は、なるが儘に任せよと云ふのではなくて、何とかせねばならん、どうするかと云ふ所が人間思想史の大切な點なんでありまして、人間が動物に勝つた、なんといふことは決して戰爭の功名談にはなりませんけれども、美しき文明を東西に築き上げたといふこの成績、永久に稱へて稱へ盡すといふことは出來ない、功績があつたとするならば、私は私共が現代に於てどうするかといふ思想的の缺點を茲に示すと云ふことが現代の過渡期に當つての私共の一つの使命であると考へざるを得ないのであります。

斯う考へまして私共の思想的の缺點がどこにあるだらうか實はこゝに書いたものをもつて居りますが時間が澤山ありませんから、書いたものを讀み乍らやつて居ると時間を取ると思つてそらでやりますが、簡條書きを要しますからこゝに讀上げます。

現代私共の思想の根底には人間本位といふ思想があると云ふことであります。法律でも何でも神佛の力を藉る必要はないのであつて、人間同志の約束で結構である、問題の解決は人間の理性を働せてその合理的解決をやれば宜いといふことになつて居りますが、合理的解決と云ふものはどこ迄行つて實現するものだらうかといふことは私は尙疑問であらうと思ひます。之れには色々の議論もあるであらうと思ひますが、少く共宗教、人間以上の茲に神を本位にすると云ふと西洋臭くなりますからして、世界の宗教思想を取りまして、茲に人間以上のもの、卽ち超人、人以上の存在を本位とするといふ思想が壤はれかゝつて來て、何でも彼でもものを解決する試金石は人間の理性であるといふこの思想位現代の私共に遣瀨なき心を起させて居るものはないではないかと思ふのであります。勿論人間本位の思想には尊ぶ可きものがある。イタリーの野に起りましたルネツサンス卽文藝復興といふ思想は正しく人間本位の思想に基いたものであつて、此の美しき思想はヨーロツパの文明を形作つたものでありますが然るに人間本位の思想には一面には特點がありまするが又弱點が現はれて來るものであります。現代私共が凡ての問題にぶつつかりまして、何だか自分に强いやうな弱さを感じて居るものは、人間本位の思想ではないかと思ふのであります。憲法で信教の自由を保障せられて居る、併しこの信教の自由はお前は宗教を信じなくとも帝國の臣民たる資格には差支へない、斯う云ふことは甚だ痛快な言ひ方ではあります、併らさう云ふことがほんとうに國民思想を健全にする思想であるかどうか、頭の人間は極く僅であります。腦髓を働かして食つて居る人間は僅でありまして、腦髓を使はずに手足を働かして居る人が多數であります。この人々が事の判斷を誤らずに行けるといふことは困難である、この困難なる人に向つてすら宗教の選擇は汝の自由である、宗教を信じなくとも帝國臣民たる資格に差支へないといふことは——無論憲法法律の立場はこうなければならんが——斯う云ふ問題を私共が考へる場合には一つこれから考へて見なければならん事柄ではないかと思ふのであります。

第二には自由と傳承であります。西洋の宗教改革がこの自由と云ふ思想を與へましてから自由々々と云ふ叫び聲が到る所に行はれました。所謂解放の思想であります。この解放の思想は洵に尊い事柄でありますが、この解放の思想が起つた爲に今迄あつたよいものすら卷添を食つて惡いといふ考へが

茲に起つて來た、坊主憎ければ袈裟迄憎いと云ふ思想が起つて、今迄あつたものを中にも尊いものが澤山あつたのでありますが、今迄あつたものゝ惡いものを潰し、同時にその中にあつたよいもの迄も構はずに潰すことを自由に考へて來た。茲で自由思想に付ては私共が深く考へなければならない。今迄私共の言ひ傳への中、トラヂション、傳承の中には尊いものが澤山ある、併し現代の吾々はニュートンの引力の法則が示す如く地球の動いて居るといふことは誰も疑はない、併らこの吾々には人間以上の靈の存在があると云ふことは、アインシュタインの相對性原理は分らなくとも眞だらうと思ふ心持程強くは信じて居らないだらうと思ふ。科學の眞理を信ずる程宗教の眞理を信じないと云ふことは、現代人が遣瀬なき心になつて煩悶すると云ふことは、現代人自らが招いた民本思想の結果であるといふことを云ざるを得ないが、更にそれは徹頭徹尾自由の濫用から來たものではないか、必ず斯う云う問題が次の時代に起るであらうと思ふのであります。

第三は今迄の生活は日本で申しますれば德川時代、西洋で申しますれば中世時代、卽ち第十五世紀に起りましたる文藝復興以前の思想といふものは、人間が生れたからには何が目的であるか斯う問ふた時に、善をなすことであると斯う答へたのであります。德川時代には奇拔な文學家もありましたけれども、勸善懲惡といふことを考へに置かない文學家はない所が今日の文學家は決して文學は倫理の奴隷にあらず、文學は宗教の奴隷にあらず、故に、今泥棒をするといふことは惡いと考へて居るが、泥棒するといふことは惡いと考へて居る想想が惡いのであるかも知れないといふやうな考へが起つて來るといふことは、眞を主とする、眞を求めやうといふ時代であるか、善を求めやうと云ふ時代であるかといふ、斯う二つに分けて考へますといふと、中世の思想卽ち德川時代の思想といふものは、善を爲すためには眞は嘘であつてもよいといふ心持がある、此の世界は三千世界といふものは、須彌山がごうの斯うのと云つて一々穿じくつた日には色々疑問があります。併ら人生は結局善をなすことにあるのだ、眞は或程度迄しか分らないから、分らないものを探す必要はないと云ふことが德川時代の考へであつた、現代の吾々は善とならうと惡とならうと事實は事實である眞理は眞理である、科學といふものゝ研究には今迄のお經に傳へて居る所のものが何であらうと、眞理は眞理であるといふ研究の仕方であります。此の眞を主とするか善を主とするかといふことが、宗教と科學との立場の違つてあると見てよいのでありまするが、今吾々は善を主とするといふことをしないで、眞を主とすると云ふことにばかり追はれて居る、此の思想的の傾向が、軈て次に何物か產み出さなければならんものではないかと思ふのであります。

第四には此の世だけで以て人間世界が終るとは考へなかつた、墓の向ふに永遠の世界を考へたものでありますから、此世では假令貧乏をしやうともごうしやうとも、前世の因果と諦めて、或は此の世に於てはつまらなくても墓を超へて向ふの世界に於ては、自分の理想を實現せられる世界があると考へたから、現代の私共より彈力性のある人生觀を有つて居つたのであります。未來が有るか無いか決定出來るものではない、來年があるか無いか學問で證明出來るものではない。併らごうするかと云ふこのことが人間の理想なのであります。第十三世紀の頃にロージャーベーコンガ、今の人間は空飛ぶ鳥、水の中を潜つて居る魚の眞似が出來ると書いた時、皆嘲り笑つた、併ら何ぞ知らん、潜航艇によつて魚の眞似が出來飛行機によりまして鳥の眞似が出來るといふ十三世紀の豫言が偶然にも當つたのでありますから、吾等が盲目減法に考へて居る、この考へが全部間違ふといふことはないのであります。少くとも現在吾々に彈力性のある人生觀が與えられないで試驗に失敗したからと云つて試驗地獄に罹つて死なねばならん、銀行の破綻の爲に十萬圓の金を預けた内五萬圓なくなつたから首を縊つて死なねばならんといふ彈力性の無い人世觀になつたのは、世に自分の生命を延長する力がなくなつてしまつたからであると斯う申しましても決して無理のないことではないかと思ふのであります。詰り過去の思想は現世未來の兩世について考へ、現在の思想は私共の思想氣分の中には現世だけで物を解決しやうと考へるから、人間が危くなつて來るのではないかと思ふのであります。

第五には合理と信仰であります。合理と信仰の問題は說明を致しますれば幾等もあるでありませうが、科學哲學から來ました論より證據と云ふ眞を求めること、卽ち議論に於て吾々の理性の滿足さえすればよいと云ふ考方から、感情意志の滿足といふことが疎んぜられて居る、信仰は情意の生活であります。合理は智性の生活であります。私共は智性の生活に熱中する割合に情意の生活に熱中しない、今の教育が情操の教育に於て缺くる所のあるといふことは此の點を言ひ現はして居るものであると云つて宜いと思ふのであります。奈良平安時代一寸過去を覗いて見ましても分ります通り、奈良平安時代に日本の人口は殖えたか殖えないか存じませんが、若し神や佛の增えることを神口と云ふことが出るかごうか知りませんが、假りに神口と名付けますならば、奈良平安時代には日本へ印度から佛教が來ました爲に神口の增加と云ふものは實に驚く可き數であつたのであります。神口が增加した結果向ふの山には觀音さん此方の山には地藏さん、地藏さんは地獄の底迄私の名前を呼んで下さるものであるならば、見離さないといふ慈悲の菩薩である。觀音さんは三十三通りに身を示現して、吾名を稱へるものは見捨てないと云ふ菩薩である

當時は物の怪の信仰が弘まつて、到る所に物の怪がぶらついて居る、此の物の怪が憑りつくと天子さんが御病氣になられる、斯う云ふ物の怪がついたり、又山の裾から山賊が出て來る、吾々の先祖は恐はくて〳〵仕方がない、其の時にいつこり笑つた地藏さんの顏がござる、觀音さんが笑ひ乍らお出になると云ふことが、ごんなに情操の教育をしたかと云ふことは私共思ひ半に過ぎるものがあると思ひます、段々斯うして參りましてそれから大和民族、私共の血統を學問的に調べたならば、此の血液の中には皆んな一緒であるなんと云ふことは決して云ひ得ないのであります。始め南洋系統が出雲の土地へ這入つて、そこへ朝鮮系統が這入て來る、朝鮮は無論滿洲に續いて居る、アイヌは白人の系統である、それに土蜘蛛が居る、是等は皆血液が違つて居つた、然るに今日は北海道北兒の涯の人間と九州の大島の人間が夫婦になつて、出來た子供は混血兒(あいのこ)だなんと誰も云はないのである。(笑聲) 皆血液が同じ同志だといふことを大學の研究室で研究を重ねて見てさう信じて居り、この血液が同じであると云ふ信念の上に研究が立つて居る、この信念をごうして作つたか、之れは奈良平安時代紀を見ますると、日本と云ふ國は決して無事泰平な國ではない、到る所で叛亂のあつた國であります。聖武天皇の時代戰爭の熄んた年は僅に一年か二年きりしかない、こんな暉合ふた國が一致團結して、同じ血液の國民であると云ふ一つの強い信念をごうして作つたか、是れを作る爲にはごうしても茲に佛教が這入つて參りまして、佛教が西域五十六箇國の人間を感化し、印度十六大國を感化し支那四百餘州を席卷し、朝鮮鷄林八道を通つて何所の國へ行つても、面(かほ)は違ひ血液は違つても、この佛に救はれるのは只一つである、ごうです貴方の心に納得出來ますかとほんごうの試驗をして四百餘州を通つて來た佛教が日本に來た時、東西の血液の違ひ位破るのは朝飯前であつたのであります。聖德太子は十七憲法の和の文字を中心として日本國民の血液は一つであると云ふ信仰を作るのに大乘佛教を應用せられたと云ふことは私が申さんでも明瞭であります。一言にして盡せばそれは信仰であります、然るに吾々は今科學と哲學の影響によつてこの合理主義に囚はれて、この信仰情操の方面にあまり力を入れなくなつた、それがために私共は苦しんで居るのである。

等六はデモクラシーと教權であります。之れは題目だけ述べまして略して置きます。

第七は唯物思想と精神主義であります、現代の吾々程唯物主義に囚はれて居るものは恐らく過去如何なる時代にもなかつたと思ひます、哲學上の問題から申しますと唯物論はつまらぬものである、併ら現代の事實から云ふと唯物論を攻擊して居る人でも唯物論に囚はれて居る、それ程今の人の思想は唯物思想が根を張つて居るのであります。併ら宗教は如何な

る宗教でも唯物論の宗教といふものは世界に一つもない、唯物論では宗教は成り立ちません。故に唯物史觀の上つたマルキシズム一派の人は宗教は阿片なりと叫ぶのは無理も無い、或人は宗教は無智の人に對するコカインである、痲睡劑であると云ふた人もある、或人は宗教とは結婚媒介をなすものであると云つた、宗教とは綺麗な着物を着て日曜日の教會に行つて、昨日買つた着物は之でありますと着物の展覽會だと云つた者である、一つ〳〵社會主義者若しくは共産主義者若しくは無政府主義者の言つた宗教の批評を並べたら限りがありませんが、社會主義が宗教を敵と視て居ることは、之は言ふ迄もありません。併し他面から考へて見ますると、現代の人々が唯物思想に囚はれて居ること、其の方が宗教の問題から云ふと、社會主義よりも重大問題であらうと思ふのであります。私共は散歩を致しても山に這入つてとある百姓家に行つてお腹が空いて堪まらない、料理屋に馳込む譯にも行かない、御飯を一杯よんで下さいと云つて御馳走になつた時、そこには麥飯を食はされる、澤庵漬を食はされても無上の味はひが出る、併し成金のやうな者が、君のやうな青い顏をして居る人間は榮養不良である、俺のお伴をして來れば立派な御馳走をしてやると云つて、京都第一の料理屋に連れて行つて御馳走を食はせて、お前は減多にこんな御馳走にありつくことは出來ないだらう、俺のお供をした御蔭で食べられると云つてそのお膳を足で突き出されたら、なんぼ御馳走でも食べられるものではないのでありますから、物それ自らに値打があると考へて居る、それは常識になつてしまつて居るが併しもちつと落着いて考へて見ると、物そのものには値打はないのであつて、物に加はる人間の精神價値が卽ちごうするかと云ふ精神價値が物の値打をつくるのである、斯ふ考へて見ますといふと、經濟の問題ですら、今考へて居るやうに經濟學だけで充分なものであらうかどうか、是れは果して疑問だらうと思ふのであります。敢えて茲に主觀主義經濟學等と云ふことを云ふ譯ではありませんが、今の問題の缺陷を私共は考へますと、何だか遣瀨ない物足らない不安な狀態にある。その心持は何所から來たものであるかと云ふことを考へて行く診察方法には、唯物思想の横溢と云ふことを數へなければならないと思ふのであります。

第八は、鬪爭主義と慈愛主義であります。是れは階級鬪爭の思想もこの中に勿論這入るのでありますが、進化論が妙に働いて參いりまして、唯物思想と云ふものはヘーゲルの思想が左の方に行つて、カールホクト一派の唯物史觀がマルキシズムになつたのだと云はれて居りますが、カールホクトは腎臟の滓が小便となつて出るやうに人間の腦髓が思想になつて出るのである、如何に立派なことを云つて居つてもそれは腦髓の小便であるといつて居るのでありますが、併し私共は本

當にさう考へられるかどうか、又ダーウインは熱帶地方ばかりで研究したものであるから、ナチユラルフリクション適者生存といふ競爭ばかり考へた、クロポトキンは北極にあつて研究しましたから人は握手すると云つた。ホツプスは人間が北から來たか西から來たか知らない、さうして自分以外に人間と云ふものがあると云ふことを知らない、人間が遇然二人途中で會つたとする、その時は二人は直ぐ殴り合ふと云つた併し夫れはやつて見なければ分りません。又或人は利他主義に立つて居る人は抱き合ふと云つて居る、これも分りませんが西洋人は情が熱して來ると抱き合ひますが、日本人は抱き合ひません、或はにつこり笑つて通つてしまふか分りません、もう一人の或學者は默つて素通りしてしまふと云つて居ります。斯ふ考へると人間の本性と云ふものは殴り合ふものか抱き合ふものか素通りするものであるか、之は分らない問題である。それを進化論者が只單に競爭の方面だけを觀察して競爭々々と云ひ習はして來たために、私共は競爭といふことは言はず語らずの間に惡いことではないと考へるやうになつてしまつたが、其の結果は競爭に敗けまするとなに彈力性のない人生觀が生れて來るのではないかと思ふのであります、結局斯う云ふ思想は進歩か保守か、今の科學は吾々の世の中は段々進歩すると教へて居る、併ら進歩する結果どうなるであらう、イタリーの永久回歸說と云ふことを說いて居る學者は人間は神さんから出たのだから進歩發展した結果神になると云つて居る、然るに進化論ミューテーションの說によりますと、人間が發明なんかして居りますのは、丁度三十から五六十迄の間で、それを遠ざかると思想が固定する時代であつて後は額に四海の波を寄せ、腰に梓の弓を張り、遂に死んで了ふのである、斯の如く今電氣燈が點き瓦斯燈が點き飛行機が飛ぶ、これはミューテーションピリオツド時代だけであつてあとは駄目になる、斯う說いて居るかどちらか知りません。進化は或過程である。進化論は決して生命の源を說いて居るのではないのであります。生命は進化する併ら進化の過程に立つて居る生命そのものは何ぞやといふことは、進化論の說明する限りで無いのでありますから、私共が進歩して行く時段々正體を突き止めて參りますると云ふと、さう常識的に確然と信じて居るやうな狀態のものではないと考へなければならんのであります。而し茲に私共が注意を要することは、以上に列擧した人を本位として考へること、自由濫用の科學によつて善を主とするより眞を主とするといふ思想、合理の二字によつて議論に合ひさえすればよいといふ思想、卽ち情操の缺けた文化並に現世標準の現代、それからデモクラシーの思想、唯物思想、鬪爭の思想、進歩の思想、斯う數へて來ますと、此の中から生れて來るものはどうしてもあの世は無し人間と云ふものはこの肉體及びこの肉體を支えて行くだけの

ものと考へて行きますと云ふと、其の結果は虚無にはなりませんが虚無的思想の入つて來るのは當り前である、虚無的思想の入つて來るのは當然のことであります、民本思想といふものは成程人間は偉い、萬物の靈長であるから偉いけれども考へて見れば自分の眼で自分の鼻の下を見やうと思ふても見ることは出來ない程あまり偉くないものである、そんなことはせんでもよいからよいのでありますが、併ら考へやうによつては自分が死ぬ前に、自分の背中を自分の眼で見て死なねば往生が出來ないと考へて見ても惡いことはないのでありますから、そんなら見やうかと云つて誰も自分の背中の見ようはないのであります、何が人本だ、人の事を云つて居るが、人の鼻の下は誰でも見えますが自分の鼻の下は見ることが出來ない、是れが人本であるとするならば、吾々はどうもそこに不安定の落着きのない何物かがあるやうに感ぜられるのであります。

結局今は前に申しました通り量の愛國心を要する時であるから少數の國民が他の少數の國民と喧嘩し合つて居つて、資本家と勞働者が相爭ひ、地主と小作とが相爭ひ、手段として階級鬪爭をしなければならんと云つて居りますが、階級鬪爭の濟んだ後はどうなるであらうか、社會問題が理想通りに解決せられた次に然らばどうなるであらうか。今の問題は今日の問題である、明日明後日の問題はどうなるであらうか、さう云ふことは宗教家が考へてよいことである、吾々社會運動家は考へて居ないと云はれるならば、人間の思想をどうするかといふことを決定することである、明日明後日は問題でない今日の問題だけを考へて滿足出來ないと云ふことも一つの立場であります。謙遜して云つてそれは一つの立場でありますが、又人間としてはそこ迄來なければ落着けるもので無いと共に社會問題の次は何だ、斯う云ふことになりますること、結局質の愛國心の充實と云ふ問題に進むのではなからうかと思ふのであります。質の愛國心と云ふことはどこから出て來るのでありませうか、此の前昨年佛教青年會の講演に參りました際に、私は眞面目になること正しき善きものが勝つと信ずることを申しましたが、實際日本の政治でも經濟界でも正しきものが勝つてゐない、併し正しきものが勝つと信ずること日本憲法が國民信念に立つて居ると云ふならば、正しきよいものが勝つと信じて行かなければ日本の將來は危ぶまれる、正しきよいと云ふ標準はどこに置くか、自分が正しきよいものと考へたのではいかない、大多數の國民生活に於て正しいよいものと考へられたことは、これが必ず勝つと皆んなで信じ合ふことであります。これが現在の質の愛國心を形づくる魂を產んで吳れる母體だらうと私は思ふのであります。詳しいことを申上げますと又時間が伸びますから遺憾乍らこれでお終ひに致します。（拍手）（文責記者にあり）